

見たことのない 音の風景を探して

Yamanaka Chihiro
ジャズ・ピアニスト

山中千尋

聞き手
酒井治人
(東京都立芦花高等学校)

クラシックからジャズへの転向

酒井: 昨日、ライヴを聴かせていただきました。こんなにきゃしゃな方があのような鋼のような力強い音を出していらっしゃるとは…なかなか結び付きません。そうかと思えばとても柔らかい音があったり、音色のパレットをたくさんおもちなのですね。クラシックとジャズとでは、ピアノの弾き方はどのように違うのでしょうか？

山中: 私は小さい頃からクラシックを学び、強拍を強く意識してピアノを弾いていましたが、ジャズは反対で、弱拍を強調します。ビートの取り方が違い、全く価値観の違う世界ですから、クラシックからジャズに転向するときは価値観の転換が必要でした。

酒井: 裏拍のどのようところに惹かれたのですか？

山中: 何かが脈打つというか…新鮮な、これは何だろう？という感じ。どこか違った場所に命が吹き込まれたような、それまでの音楽の風景とは違うところに惹かれました。

酒井: とてもすてきな表現ですね。

山中: もちろんそんなふうに表示できるようになったのはあとからです。初めはそのハーモニー、歌いまわし、そして何より、いつ何が起こるか分からないおもしろさが魅力的でした。クラシックの勉強をしていた頃、自分で「この曲、こうだったらいいのに」といろいろ組み替えて弾いていたんです。それで先生に何度も注意されました。

酒井: 自分でアレンジしてしまったということですか？

山中: たいしたものではなく、ここが♯だったらいいのに、♭だっ



○やまなか・ちひろ

(ピアニスト／作曲家／アレンジャー／プロデューサー)

群馬県桐生市出身、NY在住。日本を代表するジャズ・ピアニスト。クラシックの名門・桐朋学園大学音楽学部を経て、米パークリー音楽大学に留学しジャズに転向、在学中に米国IAJE国際ジャズコンペティションで優勝。ダウンビート最優秀パフォーマンス賞受賞、同大学を首席で卒業。リリースしたアルバムは全て国内のあらゆるJAZZチャートで1位を獲得し、第23回日本ゴールドディスク大賞、スイングジャーナル誌ジャズディスク大賞、NISSAN presents JAZZ JAPAN AWARDなど権威ある賞を多数受賞。メジャー・デビュー10周年となる2015年秋には、名門ブルーノートレーベルより『シンコペーション・ハザード』発表、3度目となる全国ホールツアーを成功させた。ニューヨーク拠点に世界中で演奏を行うかたわら、パークリー音楽大学助教授、桐朋学園大学非常勤講師を務める。

たら…と勝手に考えて曲をもって行ったことが何度かあって。先生には「そういうことが好きなら、大きくなったらジャズをしたらいんじゃないかしら」と言われていました。

酒井：枠に捉われない世界をいったん知ってしまうと、クラシックだけでは飽き足りなかったのでしょうか？

山中：クラシックを究めていくと、作曲者を通してもっと大きな世界に触れられるのでしょうけれど、私の場合は自分とピアノの間に「他者(作曲者)がいること」に違和感があったのです。作曲者という第三者なしに、自分が直接ピアノに語りかけられたら楽しいだろうなと思っていたのです。

酒井：きっかけがあったのでしょうか？

山中：学生時代、モーツァルトの協奏曲を演奏しているとき

に、先生が「カデンツァを自分の好きに弾いてごらん下さい」とおっしゃったんです。でもそのとき、あまり気の利いたものが弾けなくて。いざ自分とピアノの間から作曲家を取ってしまったら、私はピアノで何も表現できないということがすごく不満で、それから、どうしたら自分らしく音楽を表現できるのかということを考えるようになりました。

言葉で伝えることの大切さ

酒井：ライブのMCで、シンコペーションを「遠くなったり近くなったりすること」と説明されていました。私たち教師の発想ではなかなか出てこない表現だと思いました。

山中：実際、「タタン」というのは「近い」ですね。

酒井：すごく分かりやすかったです。それが揺らぎにつながっていく。直感的に「なるほど」と思いました。

山中：ピアノで弾いて表現するのと同じように、どうしたら言葉で届くか、感覚的に分かるようになるのか、ということも意識しています。私には理論と計算で緻密にいくより、もっと感性に訴えかけるような言葉のほうがコミュニケーションしやすいので。

酒井：というところ…？

山中：例えば、ライブ・ツアーでアメリカの地方へ行くとき、地元の小中学生を集めて「ジャズとはこういうもの」と説明することがあります。英語が苦手な中で、子どもたちが理解しやすい表現を考えて、明確で感性に訴えかけるような言葉がよいのでは…と経験から少しずつ分かるようになりました。絵本や児童文学など子どもが読むようなものを読み返して、その表現を取り入れています。

酒井：そういうものに触発されて作品が生まれることもあるのでしょうか。

山中：ええ！私の中で言葉と音楽は切り離せないものなので、自分自身でも文章を書く機会をなるべく多くもち、言葉と音楽の往復をするようにしています。音楽家で魅力的な言葉遣いをなさる方はたくさんいらっしゃるの、そういった方の本を読むなど、言葉と音楽が近くにある生活をするよう心がけています。

酒井：実際にジャズを演奏される方が、ジャズそのものを語ることもあるんですね。

山中：次の人に伝えていくとなると、もちろん音がいちばん大事ですけど、それぞれの心に響くには、同じぐらい言葉も大切です。海外のライブでも必ずMCをしています。私を通して日本人の生活や音楽をする風景が伝わればいいなと思っています。

到達点のないアド・リブの世界

酒井：音楽の授業にも、ジャズが鑑賞に入ってきていますが、私を含めて先生方の中にジャズの専門家はあまりいないと思います。それでも教えなければならないので、私の場合は音の組織を限定したブルー・ノート* やモードを使った創作などを行っています。でも、作品としてできあがったという到達点がいまひとつ分かりづらいのです。

山中：先生がおっしゃるように、アド・リブには到達点がなく、ほんとうにざっくりそれぞれの表現を投げ込むようなものであったほうがいいんです。到達点があると当然の結果として限界が出来上がり、それを壊すという作業になります。ジャズは「こうでなくてはならない」ではいけないと思います。そこは個人の表現です。表現に関して「うまい」「へた」はなくて、全ては個性。そこに「スケールが分かる」「和音が分かる」と基準をつくると、音楽自体が、音楽の喜びが、やせ細ってしまうんじゃないかな、と思います。

酒井：なるほど…。

山中：私も以前、ジャズを演奏するのであればこれぐらいのことが分からないといけないと思い、大学で理論をきっちり教えていましたが、学生たちを見て、私がつまらない基準をもってはダメだと指導を変えました。現場に出てみないと分からないものですね。チャーリー・パーカーやマイルス・デイヴィスが到達点だといっても、あれは一つの形であって、マイルスでないから劣っているというわけではないのです。音楽を表現する楽しさを学生が実感してくれたらいいな、と思って授業をしています。

楽譜＝MAP

酒井：演奏のときに譜面を使われていましたが、かっちりとは書かれてはいないですね？

山中：指示が書いてあるだけです。斜めの線があるだけです（笑）。

酒井：テーマも書かれていないのですか？

山中：何も書いていません。

酒井：転調していく場合は？

山中：それは一応メンバーに伝えますが、うまくいかないときはそこで方向転換して、ステージの上で解決していきます。大抵の曲は何度も演奏しているので、おおまかなストーリーは決まっていますが、ほとんどアド・リブです。

酒井：ほぼ白紙の巻物なんですね。

山中：でもマップがあるのとないのとは大違いで、例えば変えてしまった場合に、どこに飛んだかというのは目で合図

するんです。言葉はないんですけれど。一瞬で「分かった、そっちへ行くのね、はい」と。

酒井：すごい！

山中：ドラマーがスティックを落としてしまったら、それをカバーするためにこっちへ行くよ、などアクシデントにも臨機応変に対応します。

ジャズの楽しみ方

酒井：最近、山中さんが素材として選ばれている「ラグタイム」は、ジャズのご先祖のように認識しているのですが…。

山中：100年たってしまうと、言葉と同じように音楽も変わってしまいますので、そういう意味で、素材をそのまま使うと和声的にもやはりちょっと退屈になってしまいます。それこそ子どものときに私が感じていた「ここをこうすればいいのに」という感じで変えていきます。そうできるのが醍醐味ですね。

酒井：素材のいろいろな調理が可能というか。

山中：そうです。でも、あまり知られていないものは演奏しません。ジャズは、皆さんの知っている曲がどんなふうに変化したかを楽しんでいただくのが一つのおもしろさですから、「スタンダード」と呼ばれる有名な作品を使います。例えば『枯葉』はシャンソンの曲ですが、ジャズでも広く、いろいろな演奏家が自分らしく演奏しています。



○ さかい・はるひと
東京都立芦花高等学校教諭。全日本音楽教育研究会高等学校部会出版部部長。
日本作曲家協議会、日本音楽教育学会各会員。

酒井：ビートルズを演奏なさるのもそうですね？

山中：もちろんです。あれほど世界中に知られているものはありません。ブロードウェイ・ミュージカルの曲などもそうですね。

酒井：ところで、ライブの最後には『八木節』を必ず演奏されるとか…。

山中：プロフィールなどにはそう書いてありますね(笑)。「私の郷里の民謡です」と紹介して、こんなアレンジがあることを楽しんでいただければと思って演奏しています。それから…私は福島で生まれているので、震災のあと、福島のためにつくった『Rain, Rain And Rain』という曲をよく演奏します。

酒井：山中さんが影響を受けたアーティストはどなたですか？

山中：「この人」というのは難しいですね。押し付けるような感じになってしまうので…。自分のアンテナに引っかかる人がいたら、その人を基準に掘り下げていけば、少なくともそのアーティストは3人以上の人から影響を受けていますし、やっぱり自分が「いいな」「すてきな」と思った人の演奏を聴くのがいいと思います。ポップスではジャズの影響を受けているものもありますし、そういうアレンジを聴くなど、何でもいいと思うんです。ジャズは「こうです」というよりも、なるべくたくさん、広く、聴いていただくと、自分の気持ちにフィットした音楽に出会えると思います。

これが好き！が何よりも大事

酒井：ジャズについて、子どもたちや教師にぜひ知ってほしいこと、こんな聴き方から始めるといいよということがありましたら教えてください。

山中：子どもたちの音楽的な伸びしろって、こちらが想像している以上にすごいんですよ。何が好きか、どんなものを聴くとワクワクするか、楽しいか。それを自分自身で知る

きっかけがあればいいと思います。音楽の先生がご存じの、時を経て愛されているもの、それはテレビやインターネットでは得られません。自分で検索するだけでは自分の好きなものばかりになってしまうので、世界を広げてあげられるような、問いかけができるような「いいもの」を、押し付けるのではなくて共有する形にしてみたいかがでしょうか。

酒井：そうですね。

山中：やはり音楽の先生が恥ずかしがらず、「自分はこれが好きだ！」と言っていると思います。私が中学生の頃、歴史の先生はパール・バックがお好きで、授業でパール・バックの話しかなかったんです。今ならすごく怒られると思うんですけど。

酒井：国語の先生ではなく？

山中：歴史の先生でした。いかにパール・バックの表現が素晴らしいかという話から、みんなでパール・バックを読んで、ああおもしろくなって。先生がお好きなものを共有するのもいいと思います。誰かが好きなものは、きっと魅力がありますから。先生方が「いい」と思うものを、ジャンルにかかわらずおっしゃってくださるほうが刺激になると思いますし、熱くアピールしたほうが楽しいのではないのでしょうか。

酒井：話題は変わりますが、ジャズにもバイエルやツェルニーのようなメソッドはあるのですか？それともそういった類いのものはそぐわないのでしょうか。

山中：こういうヴォイスシングにすればジャズっぽいですよ、という機械的なことはできますが、その仕組みを知ったからといって…どうなのでしょうね。音楽の喜びが全く伝わってこないというか。

酒井：ああ…。

山中：私も最初、学生には理論を教えましたけれど、…そうではなくて、やっぱり自分の「いいな！」が大事ですよ。

学び合いのすばらしさ

酒井：パークリー音楽大学ではジャズ・ピアノの演奏コースをご指導なさっていますが、教えるときに心がけていらっしゃることはありますか？

山中：私はあまりよい指導者ではないと思うので、ありのままの私の経験を共有できればいいと思っています。いちばん心がけているのは、学生たちがいつも新鮮な喜びをもって音楽と向き合っていけるように励ますということです。すばらしい生徒たちに恵まれているので、それだけにプレッシャーもすごく受けています。でもそういったプレッシャーを差し引いても余りある楽しみや喜びがあることを知っているの、学生たちが悩んでいたなら「大丈夫、大丈夫」と励まし



て、音楽に向かっていったほうがいいと思います。励ますなんて言うとおこがましいですが、みんなさまざまなポテンシャルをもっているの、私はそれを見つけて、いいところ、いちばんの強みを引き出して個性をいい形にしたいと思っています。

酒井: 細かな技術的なことを、あれこれ言わないのでしょうか？

山中: 技術が追いつかなくてアップアップしている子がいたら、ここをきちんとしたらいいんじゃないかしら、とはっきり言います。パークリーでの授業は個人の実技ですから「どうしたらあなたのいちばんしたいことができるかしら」ということを目標にします。指が均一に動かない、スケールがきれいに弾けない、そういう問題がある場合は、そこを徹底的に指導します。でも押し付けるのではなくて「こうしたらどうかしら」とあくまで提案する形です。自分で気付かないとできないことなので、彼らに分かってもらうようにします。アメリカ人には「そうじゃなくて自分はこうしたいんだ」という子もいますので、それは本人に任せます。ある程度きちんと弾けるということが前提になりますから、もちろん客観的な指導もします。

酒井: 例えばジャズの枠に収まらない生徒がいた場合、それは否定されない？

山中: 絶対しないです…それはすばらしいことです！チャーリー・パーカーやバド・パウエルみたいに弾けたからって、それはすごいことですけれど、すでに出来上がった価値観と比べてあれこれ言うのは、ジャズをしていていちばん残念なことじゃないかしら…。確かにジャズの伝統や、ストレート・アヘッド**のような「ジャズはこうあるべき」という形はあるかもしれませんが、そうではない、枠にはまらない表現はすばらしいものだと思います。

酒井: 山中さんのそうした懐の大きな感性は、どうやって育ったのでしょうか。

山中: 高校生ぐらいから、小さい子が教授のレッスンに行く前の練習をみる「下見」をしていたので、教えて教わるという関係は不可分だと思っています。そのようなことが関係しているのでしょうか…。逆に私が得ているもののほうが大きいかもしれません。学校という現場で経験を共有させていただく機会があるのはとてもうれしいことです。生徒が先生から受ける影響は絶大です。一生の宝物ですから、その時間を楽しんで、大事に、人間対人間で接することができたらいいのではないのでしょうか。すみません、偉そうなことを言いました(笑)。

* ブルー・ノート (blue note) : 音階の第3音、第5音、第7音を変化させたもの。

** ストレート・アヘッド (straight ahead) : 「まっすぐに」の意。転じて、ジャズにおける、王道を行くオーソドックスな演奏を指すようになった。アコースティックな楽器による4ビート演奏をストレート・アヘッドな演奏という。



Infomation

【山中千尋 2016スケジュール】

2016年1月19日から1週間、スイス、ベルンの名門ジャズクラブ「Marian's Jazz Room」にて公演。4月/ワシントン、ケネディー・センター、リンカーン・センター(アメリカ)。6月/バンクーバー・ジャズ・フェスティバル、モントリオール・ジャズ・フェスティバル(カナダ)、モントレー・ジャズ・フェスティバル(アメリカ)、8月/カーネギー・ホール(アメリカ)、12月/東京オペラシティ コンサートホール: タケミツ メモリアル。その他日本国内、ヨーロッパ、キューバでの公演を予定しています。

【CD Information】

ベスト 2005-2015

メジャー・デビュー10周年初のベストアルバム。2005年のデビュー後、ユニバーサルミュージックに残してきた名録音をコンパイル。
UCCQ-1048/定価3,456円(税込)



ライブ・イン・大阪！！

山中千尋率いる女性ピアノ・トリオ＝スフィアズによる、初のライブ・アルバム。ビルボードライブ大阪でのライブを収録。ライブパフォーマンスに定評のある山中ならではのパワフルかつ繊細なステージを音源化。

SPHÈRES feat. 山中千尋、カレン・テバーク、ダナ・ロス
UCCQ-1050/定価3,024円(税込)



授業者に 訊く— ①

小学校では、導入されたばかりのデジタル教科書を使った1年生の鍵盤ハーモニカの公開授業を取材しました。子どもたちは飽きることなく歌い、鍵盤ハーモニカを吹き、友達と交流していました。元気いっぱい、活動が大好きな子どもたちの姿をお届けします。



授業者：種田伸和（岐阜市立長良西小学校）

本時の授業の位置付け

本時は11時間扱いのうちの第8時、中間研究発表会での公開授業です。鍵盤ハーモニカの基本的な演奏法を身に付けます。また、1学期に学習した拍の流れやリズムを土台に、「ドレミファソ」の階名を覚えて歌ったり、指を動かしながら歌ったりすることを目標とします。授業では、鍵盤ハーモニカと歌の演奏を交互に行うことで、互いに聴き合い、意見を交流し、子どもたちの「自ら学ぶ力」を育成していきます。



和田 満先生
岐阜市立長良西小学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価
導入	○ 音楽ドリル「どんぐりさんのなかま」「どれみふぁそのまねっこ」(常時活動) ・ 『なかよし』の範唱や伴奏に合わせて、指の体操をしながら歌う。 ○ 鍵盤ハーモニカと歌がかけ合いをしている演奏を聴く。 ・ 前時までの学習から自分たちのイメージを確認する。	● 楽しみながら、無理なく演奏できるようにする。 ☆ 教師の範奏に続けてリズムで演奏ができる。 ● 交流したことを板書し、確認する。 ● 演奏時の注意点や練習方法を確認する。
展開	○ 全体で聴き合う。 ・ ドレミで歌いながら、正しい運指で演奏できるよう、繰り返し練習する。 ・ トウトウと吹きながら、タンギングに気を付けて演奏できるように繰り返し練習する。 ○ ペアで聴き合う。 ・ 伴奏に合わせてペアで鍵盤ハーモニカと歌を交替しながら演奏し、聴き合う。	● 聴き合いがスムーズに進むよう、ポイントをはっきりさせておく。 ● 手の形や運指を確認する。 ● 範唱や範奏を聴かせ、きれいな声や、やさしい音色に近付くことができるようにする。 ☆ 拍の流れにのって演奏しているか。 ☆ ドからソまでの音の位置と指番号に気を付けながら、順次進行と跳躍進行の旋律を演奏することができる。 ☆ タンギングをしながら演奏することができる。
まとめ	○ 鍵盤ハーモニカと歌で演奏する。 ・ 全体で鍵盤ハーモニカと歌を交替しながら演奏する。 ・ 演奏後、感じたことを交流する。 ・ 授業を振り返り、学習のまとめを交流する。 ・ 教師からの評価を聴き、次時への見通しをもつ。	● 演奏後に交流を行い、自分や友達の演奏を振り返ることができるようにする。 ● 表現や工夫のよさの評価だけでなく、思いに合った表現を見付けるための試行錯誤の様子や、工夫のよさを感じ取ったときの様子についても評価する。 ☆ 相互評価 ☆ 自己評価 ☆ 教師評価

デジタル教科書を使って鍵盤ハーモニカを学ぶ

聞き手：今村友美（大阪市立本田小学校）

「かわり」を生かした学びの実践

元気な1年生

今村：種田先生は教務主任をなさっているとうかがいましたが、授業を拝見したときは絶対に担任の先生だと思いました。

種田：教務なので、今年は1年生の1クラスと2年生の1クラスしか音楽を担当していません。ただ本校は小学校でも教科部制をしているので、研究は教科部で行います。



○おいだ・のぶまさ
岐阜市立長西小学校教務主任

今村：学級としてのルールがきちんとつくられていますね。楽しそうにのびのびしているようで、先生が「〇〇さんと勝負！」とおっしゃると、みんながじっとその子に注目していたのがたいへん印象的でした。

種田：自分の演奏ももちろん大事ですが、友達の演奏も大事にしてほしいと思います。そういう観点で、じゃあ話も聞こうねと。音楽だけでなく、人として友達の意見を聞けるなど、そういうところも大切にしています。

今村：子どもたちの歌を聴いて、音がきちんととれているなと思いました。

鍵盤ハーモニカの音も頼りない音ではなく、息がしっかり入っていて基礎ができていましたね。

種田：本校では朝の会などでふだんからしっかり歌いますので、その影響があるのかもしれませんが。

小学校のICT環境

今村：授業の中で自作のパワーポイントを使っていらっしゃるいましたが、ICTはお得意なんですか？

種田：すごく得意というわけではありませんが、よく使います。

今村：校内のICT環境はどのような感じですか？

種田：各教室にタッチペンの電子黒板として使える50インチのテレビがあります。デジタル教科書は国語、算数、理科、社会、書写、音楽で導入されており、サーバー管理なのでどの教室からでも見ることができます。その他に実物投影機（書画カメラ）があります。岐阜市は全校ICT環境が整っていて、校内もLANがつながっています。

今村：デジタル教科書はよく利用されますか？

種田：使っています。

今村：音楽が苦手な先生ほど使ってほしいものですね。

種田：…僕からすると「それだけじゃだめだよ」とも言いたいのですが…。

今村：「これがないともうできない」というふうになっている場合もあるかもしれないですね。でも、デジタル教科書があるおかげで、自分が子どものそばには行けますよね。

種田：そこはいいところですね。再生しながら手の形や運指を指導できます。よくそうしています。

デジタル教科書は「動画」も魅力！

今村：今回の「どれみで うたったり ふいたり しょう」でデジタル教科書を使われて、いちばんいいなあと感じたところはどこですか？

種田：鍵ハを初めて使う題材だったので、吹き方の動画です。

今村：1時間の中でたくさん見ていましたね。3～4回どころではなかったですね(笑)。

種田：はい(笑)。「かわいい子(動画で吹き方を実践する女の子)になるよ」と言うと、できるようになりました。素直な子どもたちです。「しっかりやりなさい！」と言うと時間がかかってしまうのです。

今村：動画は効果的であるということを確認しました。

種田：ああいう動画に子どもは惹き付けられますね。

今村：あのとき、子どもたちは初めて『なかよし』を聴いたのですか？

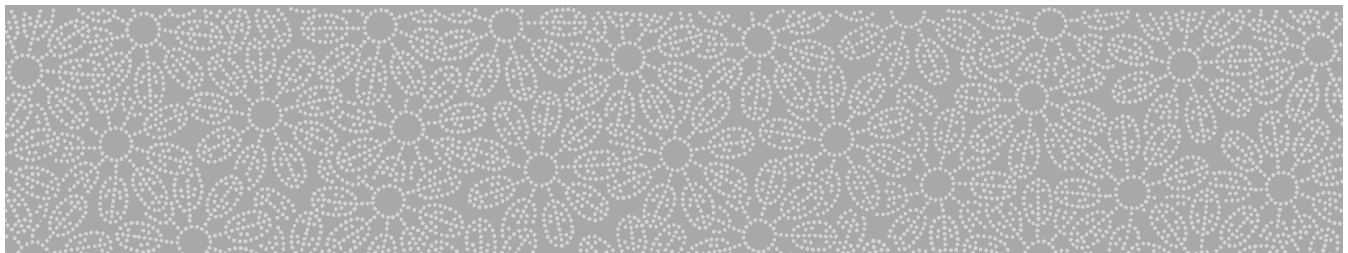
種田：そうです。

今村：すごいですね。1回ぐらい前時に練習していたのかと思っていました。

種田：今まではドレミしか弾いていなかったもので、跳躍する部分は難しいと



○いまむら・ゆみ
大阪市立本田小学校指導教諭



今村：先生の「歌と鍵盤が一緒になったら、どんな感じがした？」という発問に、子どもが少しとまどっているように感じたのですが、先生ご自身としてはどういう答えが返ってくると予測されていましたか？

種田：歌と鍵盤が一緒になるから「おもしろい、楽しい」と言うかなと思っていたのですが、もうすでにこの曲は楽しいと言ったのに「先生は今さら何を聞いているんだ？」と感じたのでしょうかね。私自身「あ…！」と思ったのですが、「2つ重なるから『なかよし』なんだ」と言ってくれた子がいてよかったです。

今村：あの子はすばらしかったですね。

種田：1つずつステップを上げていくにあたって、今回は鍵盤が入り、歌と鍵盤を合わせることで音楽が広がる感じを楽しみながらつかんでほしいと思っていましたが、ドレミの学習もあるので、吸収する要素が多いですね。それをできるだけ自然に学ばせたいと思う題材でした。

「聴き合う」ことの大切さ

今村：どの学年でもペアで聴き合うことに力を入れているとのことですが、高学年になると、聴く力もだいぶ変わってきますか？

種田：変わります。1年生ではマルかバツか、「いいよ」ぐらいしか言えませんが、5、6年生になると、ペアやグループで聴き合うと「僕はこういうふうにやりたいんだけど」と言えるようになります。意見がぶつかったときは、折り合いをつけることもあります。これはどの教科でも大事にしていることです。学校の音楽科教育は、仲間とともに学

子どもたちも言っていました。

今村：子どもたちが跳躍のところでもういたときは、実際に鍵盤を出して吹いていらっしゃいました。デジタル教科書を使いながらも、うまくアナログを取り入れていらっしゃるなと思いました。実物投影機があるなら、上から写してみてもいいと思います。実際に私はよく実物投影機のところで弾いて手の動きを見せています。

種田：いいアイデアをありがとうございます。今度そうしてみます。

今村：デジタル教科書をお使いになって、改善してほしいところはありますか？

種田：伴奏だけの音源があると、そのつどCDを入れる手間が省けて、他の先生たちももっと楽に使えるようになるかもしれません。その他については、どこをクリックすればよいのかも明確ですし、ドレミが風船と一緒に高くなるイメージなども分かりやすいです。教科

書自体が工夫されていますから、1つのページでいろいろ交流できますね。

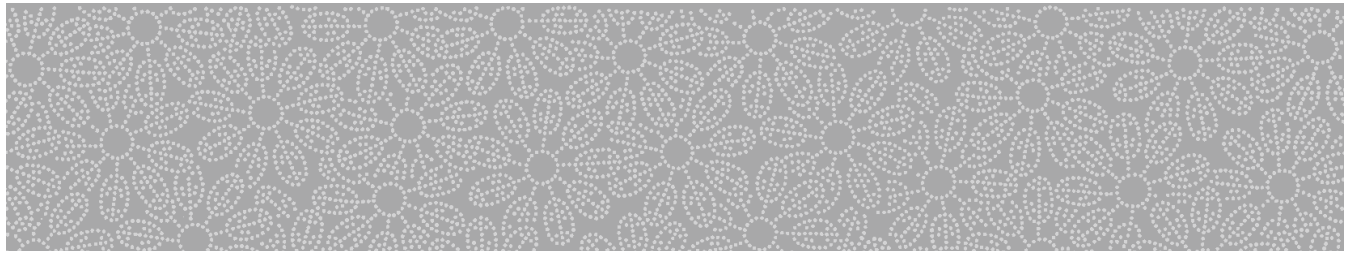
言語活動への意識

今村：「この音楽はどんな感じがした？」という質問に対して、子どもたちは「楽しかった」と答えていました。音楽の言葉を増やしていくことを意識なさっているのでしょうか？

種田：初めての曲では「どんな感じがした？」と聞くようにしていますが、子どもによっては音楽的な言葉ではなく、もっとイメージ的な言葉の場合もあります。

今村：感受の部分と知覚の部分ですね。

種田：それをある程度分けて板書して「大きいから激しい感じがするんだね」というように音楽の諸要素とイメージをつなぎ、そこに表現を組み合わせていきます。1年生だと考えがあっちこっちいってしまいますけれど。



習するところに意味があります。友達と歌うこと、一緒に音楽をつくることは絶対に楽しいはずなので、できるだけ聴き合う授業にしていこうと心がけています。

今村：今回は「指番号」と「トゥトゥ吹き」に聴くポイントをしばっていたので、子どもたちもしっかり相手を見ていたと思います。飽きずに最後までできたのは、やはり魅力的な活動なのだろうと思いました。

種田：高学年では「聴き合いのポイント」と呼びますが、1年生では「きくきくポイント」と言っています。今回、トゥトゥ吹きはいらなかったかと反省しているところです。1年生のうちは「いいよ」「悪いよ」になってしまいますが、それだけでも自分できちんと評価できれば、最終的に自分の演奏にもつながると思っています。

今村：友達が見てくれることで、やる気も出るだろうと思いました。

種田：特に技術的なことについては、初めのうちはわざと「10回やるよ」と言う「10回もできないよ」と言っていたけど、終わってから「10回できたね。すごいね。だからこんなに吹けるようになったんだよ。楽しいね」ということを繰り返しています。

今村：楽しみながら何回も回数を重ねることで、自然と技能が上達していたのが音を聴いていてよく分かりました。

種田：吹くのが苦手な子どもたちは、今吹けないと2年生、3年生になって厳しくなるので、ここでできるだけ上達させたいと思っています。うまくいかないこともあります。そういうときに「もう1回聴いてよ!」「いいよ、次は僕のも聴いて」と言えるようになるといいなと思います。ただし1年生の

場合はそれだけでは集中力がもたないので、前半は私と全体練習をして、後半は聴き合いをするようにします。

1年生で大事にしたいこと

今村：45分があつという間でした。子どもたちはよく集中していましたね。意欲も高かったです。いつもあのような様子ですか？

種田：そうです。ただし興味がないものにはだめという、子どもらしい子どもたちです(笑)。

今村：鍵ハはハードなのに、ずっと吹いていましたね。

種田：活動的なことが好きなクラスなので、話すより動かしたほうが良いと感じています。おそらく僕が担任だと思われたのは、僕が意外ときついことも言っていたからではないでしょうか。

今村：コミュニケーションや信頼関係が、毎日一緒にいる先生という感じでした。

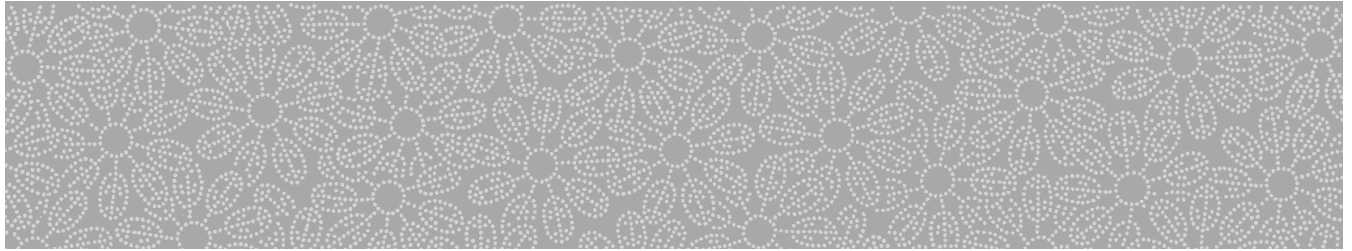
種田：特に1年1組は、国語の授業中に廊下を通った僕に「おいだせんせい〜」と手を振るような子どもたちです。そういうときには教室に入っていき、「今はだめ」と言います。本校では、1人の先生が自分のクラスを抱え込むのではなく、学校全体で見るという考えで行っています。

今村：先生方の関係もとても良好なのではないでしょうか。

種田：そうですね。学年部もよくまとまっていて、それぞれで実践を積んでいます。1年生は横並びにしないと保護者も不安になりますので、ある程度そろえるところはそろえます。また、学級としてのカラーも大事にしています。音楽の授業は1組ぐらゐの元気があると楽しいですね。

今村：1年生で大事にされていることは何ですか？全国の学校では、1年生の音楽は学級担任の先生が担当すること多いですね。





種田：1年生は歌ったり演奏したり、表現することが好きですから、それを思いっきりさせることを大切にしています。その鍵としては、やはりリズムをとっかかりにするといいと思います。拍にのれるのも、1人ではなくてみんなでのるところを楽しんで、発散できるようにし、その中で合わせようという意識を付けていっています。

今村：まさにそれが体现された授業でしたね。子どもたちが音楽を楽しんでいるのがたいへんよく伝わってきました。

基礎からどう発展させていくか

今村：今回は公開授業ということもあって、教科書の内容で基礎をしっかり身に付ける授業だったと思いますが、学年が上がるにつれて、子どもたちはちょっと難しいことにチャレンジしたいという意識が出てきますし、難しいことを提示するほうが興味を示すと思います。去年5年生をもっていらっしゃったときは、どんな活動をなさっていましたか？

種田：教科書の教材曲を使うことを原則していますが、例えば創作は難し



くしてみました。去年はクラッピングのリズムアンサンブルづくりを扱いましたが、発展として他の楽器を入れたり、クラス全体でループさせたりしました。全く違う教材ではなくて、発展させて使っています。合唱も、クラスでの三部合唱はうまくいきますが、それだともおもしろくないので、わざと5人ぐらいの少人数で緊張感をもって歌わせます。耳ができてくると、子どもたちは何とかしようとするんですね。

今村：違和感を感じる耳を育てるのは大事なことです。何が間違っているのかは分からなくても、何かが違うということを分かってほしいと思います。

種田：曲は教科書のものでも演奏形態を変えてみると、子どもたちは必死になって取り組みます。

今村：とても勉強になりました。先生の実践をまねさせていただいて、私もがんばりたいと思います。



授業者に 訊く— ②

中学校は、広島市を訪れました。広島市立井口台中学校の音楽室からは、世界遺産の厳島神社を有する、安芸の宮島を望むことができます。生徒たちは、日本の伝統文化を身近に感じながら、熱心に授業に取り組んでいました。



授業者：中常泰彰（広島市立井口台中学校）

本時の授業の位置付け

長唄『勧進帳』は、能『安宅』の謡の一部分を取り入れた「謡ガカリ」があり、詞章（歌詞）の共通する部分が多くあります。また、浄瑠璃の影響を受けた「外記ガカリ」があるなど、他の芸能の影響を強く受けています。この長唄『勧進帳』と能『安宅』の謡を比較鑑賞し、共通点や相違点から、それぞれの特徴や生み出される雰囲気を知覚・感受することにより、我が国独特の音楽の特徴や文化的・歴史的背景についても、理解を深めることができると考えます。

世界遺産の厳島神社では、雅楽や能など毎年数多くの伝統音楽が行われています。生徒が、長い歴史の中で受け継がれ発展してきた日本の伝統音楽の価値について自分なりの考えをもち、今後もそれらを大切にしていこうとする態度を養えるよう、この題材を設定しました。

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価
導入	・ 前時までの内容を振り返る。 ○ 長唄と謡、それぞれの部分を聴きながら、その特徴を思い出す。 ○ 謡などの音楽の特徴から捉えたよさについて意見交流する。	● スライドを活用し、音を聴かせるだけでなく視覚的にも支援する。 ☆ 我が国の伝統的な音楽の特徴に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。
展開	日本の伝統的な歌唱が現在も長く受け継がれ、多くの人々に親しまれている理由を考えながら鑑賞しよう。 ・ 能について全体を味わい、身近な地域で行われていることを知る。 ○ 能の謡を謡う。 ○ 舞を体験する（ヒラキとシカケなど）。 ・ 厳島神社で奉納された能を鑑賞する。	● 実際に楽譜を使って謡う。 ● 扇を使用して舞を体験する。 ● 能のよさについての感じ取りが曖昧な生徒には、能舞台の写真などを見せて時代背景に再度着目させ、謡の特徴とかかわらせて考えるよう促す。
まとめ	○ 日本の伝統的な歌唱が現在も長く受け継がれ、多くの人々に親しまれている理由を考えながら、そのよさを相手に伝わるよう文章に書く。	☆ 能の音楽（謡）の特徴を、長唄の特徴や歴史的背景と関連付けて理解し、日本の伝統的な歌唱のよさや美しさを味わって鑑賞している。



玉木雅人 先生
広島市立井口台中学校校長

日本の伝統音楽を身近に感じて欲しい

聞き手：田中龍三（大阪教育大学）

「歌舞伎」と「能」を比較して

田中：授業を拝見して、中常先生はたいへん雰囲気大切にされていると感じました。私も授業では雰囲気を大切にすべきだと思います。その中で、生徒たちがとても意欲的に取り組んでいましたね。

中常：『勸進帳』は、魅力的でおもしろい題材なので、先生方もよく工夫されています。単独で聴かせたり、オペラと比較したり、「寄せの合方」を器楽で扱ったり、ほんとうにいろいろな実践があるのですが、歴史を軸として取り上げていく授業はあまり見られませんでした。今回は、始めにスーパー歌舞伎の鑑賞から入り、そして江戸時代、室町時代と、ルーツをたどるような授業にしてみました。

田中：なるほど。そのルーツを知ること、「アレンジされて今の歌舞伎があるのだ」ということを学ばせたかったのですね。

中常：はい。授業で取り上げた「旅の衣は～」の部分は「謡ガカリ」で能と関連がありますが、「時しも頃は～」の部分は「外記ガカリ」、すなわち浄瑠璃と関連があります。

田中：そうですね。



中常：以前はこれらを比較鑑賞していたのですが、中学生にはなかなか難しかったようです。ですから、どれか一つに焦点を絞ろうと思い、今回は長唄をしっかりと学習したあとに能を聴き、比較させることにしました。生徒たちが興味・関心を失うことなく、実際に歌ったり演じたりしながら知的好奇心をもてるよう工夫しました。

日本音楽のよさ

田中：実際に舞を体験させながら、体幹を鍛えなければいけないという話をされていました。体幹というのは、最近テレビなどでよく出てくるキーワードですから、生徒たちも直感的に理解できると思いました。しっかりと体を鍛えておかないと、ちょっと舞うだけでも大変でしょうから。

中常：剣道や柔道、ゴルフやバレエな

ど、さまざまな運動をしている生徒がいますが、体幹の使い方はどれも同じです。それを生徒は実感していました。

田中：それから、音楽室に「丹田」と大きく貼ってあるのも、大切なことだなあと感じました。

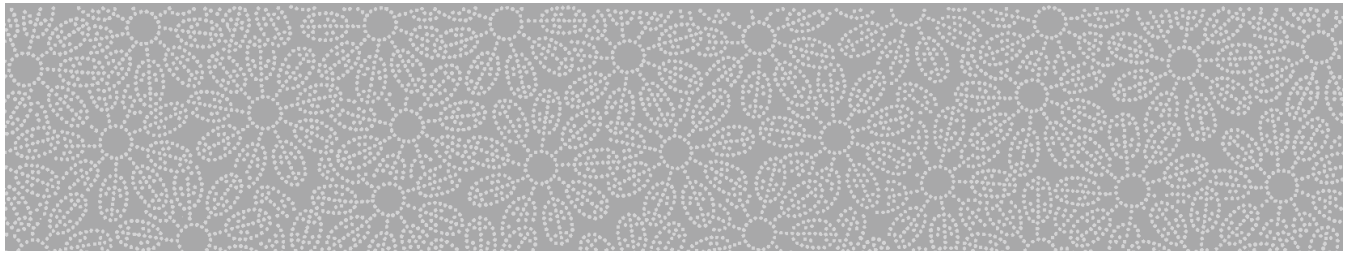
中常：謡の声の出し方は、体の使い方という意味も含め、吹奏楽や合唱の指導でも活用できます。日本音楽を勉強して悪いことは何もありません。たいへんおもしろいですよ。

田中：先生は能のお稽古に通っていらっしゃるのですが、そこでは何かご苦労されたことはありますか？

中常：始めたばかりの頃は、日本音楽独特の「間」になかなか慣れず、難しく感じました。それがしだいに慣れて心地よいと感じられるようになると、その独特な雰囲気が心に染み入ります。当時、武士の社会においても、ゆっくりとお酒を飲みながらそうした「間」を堪能



○なかつね・やすあき
広島市立井口台中学校教諭



していたのでしょう。また、指揮者がいないことにも驚いたのですが、演奏者どうしの「間」がとても新鮮でした。こういうことから、日本音楽はいいなと思います。

生徒にどのように問いかけるか

田中：授業では、長唄と能の謡を比較鑑賞させていました。生徒たちからは、長唄は町人の文化であるから華やかでさらびやか、一方、能についてはもの静かで浮いたところがなく、武士の文化だ、という意見がありました。生徒が2つの文化について知覚・感受を通して理解している様子がとてもよく分かる授業でした。

中常：生徒の多くは、武士は戦をして勇ましいだけというイメージをもっていました。今日の授業では、謡の言葉の一つ一つの重みや舞の洗練された動きを体験することで、能は武士にとっての教養の一つで折り目の正しさや品格があるということを実感してほしかったのです。

田中：武士は精神的に何を大事にしている、それが能という文化にどう影響しているのか。実際に体感するというプロセスを経ることで、日本の伝統音楽の学習において、「どこがすごいのか」を理解することにつながっているのだと思います。先生が舞の指導をされたあと「しんどいでしょ」とおっしゃったとき、生徒は「能楽師はどれだけ大変なことをしているのか」と大きな感銘を受けたことでしょう。

中常：鑑賞の授業で私が大事にしているのは「初発の感想」です。オープンに聴かせることで音楽との出会いを大切にしています。前時は、ワークシートに

音楽の要素についてではなく感じたことを自由に書かせましたが、するとたくさん感想が出てきました。自由に感想が言える雰囲気や大切に、今日の授業では事実を明らかにしたのです。音楽から感じる特徴や雰囲気を視覚化したり再現化したりして、他者とのかわりの中から新たな価値をつくっていく、さらには、単元の最初の授業と最後の授業で音楽の聴き方が変わっている、それがねらいでした。

田中：それまでの指導がきちんとできていれば、生徒たちは知覚・感受し、思考・判断するというプロセスに進めると思います。理論から入るのか、それとも感性的に入り出来上がったものを分析的に進めていくのか、その違いですね。

中常：生徒への問い方で変わってきましたね。

田中：以前、『魔王』の授業の指導助言をしたのですが、5W1Hなどを設定させてイメージの深化を図り、興味・関心を高めるような方法をとってはどうか、とアドヴァイスしました。すると、のちに演奏を聴いたときに、「ここで声がこう変わっている」と生徒の知覚が深まっていました。やはり、イメージをはっきりさせることが大事ですね。

中常：なるほど。たいへん勉強になります。僕はよく比較させようと考えてしまっているのですが、一つの題材について見方を変えてみるというのはよい方法だと思います。

田中：どういう力を付けたいか、という視点は絶対に外せません。しかし、それに対しどのように力を付けていくのかというのは、いろいろな方法があると思います。学校での音楽科の学習なので、「なぜだろう」という部分がなけれ



○たなか・りゅうぞう
大阪教育大学教員養成課程音楽教育講座教授

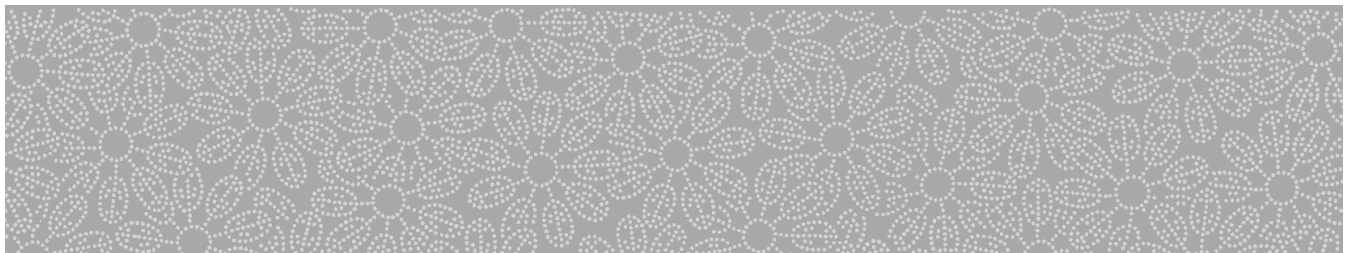
ばいけないと思います。これまでも多くの方法が示されてきましたが、それが全てではありません。それを開発していくのが本来の教師の仕事ではないでしょうか。

中常：教師がどう焦点化していくかによって、その題材の魅力の伝わり方が変わってしまうと思うので、よく考えなければいけないと思います。授業でどのように魅力を伝えればよいのかを工夫することが重要になりますね。

臨場感を伝える

田中：『勧進帳』と『安宅』を、町人の文化と武士の文化の違いという視点で見ましたが、生徒たちが自分で調べてその他の違いにも気付いてくれたら、先につながっていきますね。

中常：鑑賞はやはり臨場感が大事だと思います。例えば、プッチーニの『ラ・ボエーム』を観て、主人公のミミが亡くなっても生徒が泣かないのは、感情移入していないからです。『勧進帳』の場合、時代背景としては1185年に守護・地頭が設置されたことが大きなポイントで、義経はほんとうに命からがら安宅の関所に行きます。大警備網が全国に張り巡らされた中で、交通の便がない



時代に奥州まで逃げるという背景を伝えることで、生徒が臨場感をもって鑑賞できると思います。

田中：私もかつて中学校に勤務していたときに『勸進帳』は何度も扱いました。歌舞伎には様式的な美しさがあります。ただ、生徒にはとっつきにくいだろうと思い、安宅の関のドラマを見せてから『勸進帳』の学習に入ったところ、今はここの場面なのだと理解できていました。生徒たちの現代の生活とどう結び付けて鑑賞させるかというのが大事ですね。

中常：そうですね。その大事さを最近よく感じます。

「感動体験」をさせたい

田中：生徒たちは音楽の授業が終わったあと、教室に帰りながら「旅の衣は～」などと唄っていますか？

中常：はい。その抑揚や節回しが、生徒たちにはおもしろいのでしょう。日本の伝統音楽というのは、安易に五線譜にするのではなく、音価や音高に加えてその独特な質感を視覚化しながら、それを教授したり感じ取らせたりすることが大事だと思います。

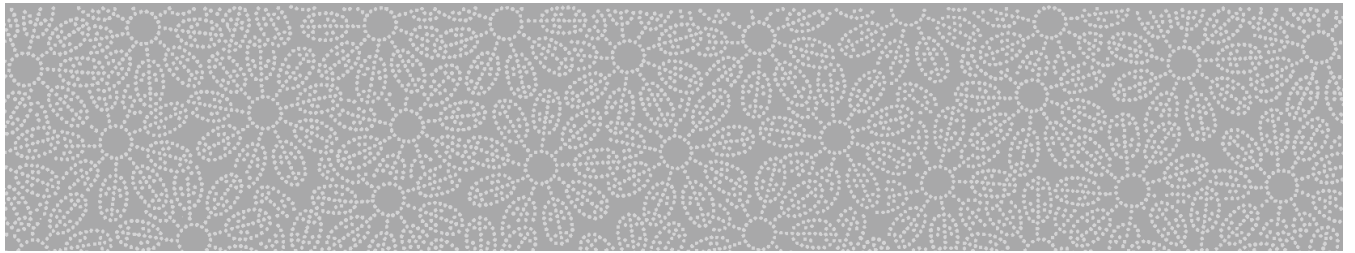
田中：なぜそのような唄い方をするのか、という必然性ですね。なぜこれを勉強するのか、というのがないと、学習は成り立ちません。『勸進帳』では「時しも頃は如月の～」（「ぎ」のところで長く

節回しが入る）の部分で、なぜこんなに音を延ばすのだろう、と生徒に興味をもたせることによって「おもしろいな」と思わせるのが、授業の醍醐味の一つですよ。

中常：音楽の教師として、世界中の音楽それぞれに価値があるという視座をもたなければいけないと思います。ふだんJ-POPなどは聴いていても、日本の伝統音楽はなかなか聴きませんから。

田中：そこに、学校で音楽を学ぶ意味がありますね。

中常：僕ら音楽を学んできた人間は、今までの人生の過程の中で音楽に対しての「感動体験」があります。その感動を味わってほしいと思って教師をしています。いきなり理屈から入るのではな



く、ざっくりどぶんと聴かせたいのです。僕はヴェルディのオペラを聴いて「すごいな」と思い、そこからオペラについて興味をもちました。

田中：先生がおっしゃった「感動体験」があるからこそ、生徒たちが教室を出たあとも、廊下で口ずさんでいるのだと思います。私も、ベートーヴェンの『第九』の冒頭のバリトンのソロがかっこいいなと思ったのが音楽の道を志すきっかけでした。

中常：伝統音楽の楽しさは、ただ楽しんでいる“fun”ではなく“interesting”という知的好奇心だと思います。難しいと思われる伝統音楽に興味をもたせるにはどのような方法があるのか、模索しております。

田中：教師は興味をもたせるための引き出しをたくさんもつことが大事ですね。先日、能楽師の方の話を聞きました。舞台で使う扇には絵柄が施されており、曲目や場面によって使い分けるそうです。実際に見に行くと、そこに興味をもって鑑賞することができますね。『勸進帳』ですと、役者の屋号によって小道具の様式が違うので、それを知って観に行くと“interesting”です。今日、先生が授業で話されたことは“interesting”につながるな、と思います。

身近なところから学びを深める

田中：次は、この授業をどのように発展させていこうと考えていらっしゃいますか？

中常：今回は歌舞伎との比較でしたので、次回は西洋音楽と比較鑑賞させようと思います。

田中：日本の伝統音楽で学んだことを、

彼らがどのように社会と関連させていくかという部分ですか？

中常：そうです。今回は、学校からいつも宮島を見ている生徒が、厳島神社にある能舞台が世界で唯一の海に浮かぶ能舞台であることや、そこで伝統芸能が行われていることを知らなかったの、その点をこの単元の身近な課題とすることにしました。

田中：だから厳島神社の能や能舞台にポイントを置かれたのですね。

中常：はい。課題としてスタートでもあり、ゴールでもあったのです。これからは、「課題を発見する能力」という点も重要になってくると思いますが、それを教師が見付けることも大事なのではないかと思い、そこで、感じ取った要素を生活と関連させるという視点で鑑賞の授業を考えました。生徒たちにとって日本音楽を理解するよりどころは生活だと思います。身近なところから伝統音楽に入っていくことで、直感的に感じられるようになるはずです。

田中：身近なところで何が行われていて、それが日本の文化とどうかかわっているのか、さらには国際社会の中でそれがどういう意味をもっているのかというところが大事ですね。

中常：本校では「オールイングリッシュによる朝会」という、全てを英語で進行する生徒朝会を実施しています。ただ、英語を話すことだけでなく、日本の文化のよさを理解することが、国際人として世界の人々と交流するために必要な要素だと感じます。能の極限まで研ぎ澄まされた動きや美に、世界の人たちが興味・関心をもっていることにも触れたいですね。

田中：そうですね。能のよさをよく理解できる、工夫された授業だと思いました。今日はありがとうございました。



特集

ヴァンからの 鑑賞ガイド

～東西名作のあらすじを4コマ漫画で！



イラストレーション：カワチ・レン

中学校や高等学校での鑑賞は、音楽と他の芸術や文化・歴史とがどのようにかわり、結び付いているかという点も指導事項の一つとして位置付けられています。

歌舞伎、能楽、文楽、オペラ、ミュージカル、バレエ…。有名な作品であっても、いざ「どんな物語なのか」を説明しようとして困ってしまったことはないでしょうか？

そこで今回は物語の「あらすじ」に着目し、4コマ漫画でご紹介いたします。

各作品のページ下には、「鑑賞実践へのメッセージ」として、その分野に精通された先生方からのコメントを掲載しています。

名作への興味・関心がさらに深まることを期待しつつ、お届けします。

あらすじの表現には多少強引な展開もありますが、「4コマ」ということでご了承ください。

椿姫 *La traviata*

オペラは悲恋が多い
いまわのときでも3分歌います



アレクサンドル・デュマ・フィスが実体験に基づいて書いた『La dame aux camélias 椿を持つ女』が原作。ジュゼッペ・ヴェルディ作曲、1853年初演。オペラのイタリア語の原題は「La traviata 道を踏み外した女」という意味である。初演前、ベネツィアの検閲当局へ提出されたときには「愛と死」というタイトルが付けられていたが、当局から上演許可が得られず、劇場側の意向で時代を150年さかのぼらせ、カトリック教義を前面に出した現在のタイトルとなった。

谷口桃子（秋田県美郷町立美郷中学校）



「オペラ」の魅力に迫るため、生徒の感性に働きかける“しかけ”を授業の要所要所にちりばめます。具体的には、登場人物の性格やアリアの歌詞などの活字情報から、実際はどんな音楽表現をするのか予想してから聴いたり、キャラクターが対照的な登場人物のアリアや二重唱を音楽的に比較しながら聴いたりして、知覚・感受を深めていきます。こうして授業が山場を迎える頃には、生徒は“しかけ”どおり、すっかりその作品の虜です。

道成寺物 安珍・清姫

日本の舞台の定番 能、歌舞伎、文楽、組踊など数知れず



いわゆる「道成寺物」は、紀州(和歌山県)の道成寺伝説に基づく安珍・清姫を登場させるもの。およそ18世紀頃からの上演記録が残っている。清姫については寡婦であったり少女であったり、言い伝えによってその立場は異なる。この安珍・清姫の説話からは、能『道成寺』、歌舞伎『京鹿子娘道成寺』、文楽『日高川入相花王』、組踊『執心鐘入』などの他、オペラや映画、フラメンコなど多くの芸能が生まれている。

島田 聡 (群馬県立館林女子高等学校)



見どころ満載の華やかな歌舞伎舞踊を支える音楽として、能や文楽の音楽が「乱拍子(謡ガカリ)」や「道行(竹本)」に、さらに流行歌や民謡にも転用されています。このように、歌舞伎がさまざまな音楽や芸能を摂取し成立していることを、歌唱表現を含めた鑑賞の題材構成とすることで理解できると考えます。もちろん、艶やかな衣裳の「引抜き」や小道具、舞台装置などに触れ、総合芸術として味わうことで、生徒の音楽観を広げたいものです。

白鳥の湖 *Swan Lake*

古典バレエといえばこれ！
版がたくさんあるので、見るたびに違います



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー作曲、1877年初演。その後、数多くの振り付けが生まれた。結末については初演時と同じく悲劇的なものや、ジークフリートが悪魔に打ち勝つハッピーエンドのものもある。また、もともとオデットとオディールは別々のバレリーナが踊る設定であったが、現在は一人二役で演じられることが多い。

高橋辰也（洗足学園音楽大学）



初演版はさまざまな要因で不評でしたが、チャイコフスキーの死後、振付師ブティパとイワノフが手を加え蘇演し、大成功を収めることになりました。このときの演出振付を基礎として、現在さまざまな演出振付版が上演されています。また踊りの伴奏音楽に過ぎなかったバレエ音楽を、優美な旋律や華やかなオーケストレーション、登場人物を表す動機を用いるなどして芸術音楽にまで高めた作品です。組曲だけでなく作品そのものを指導できるよう、バレエに精通してください。

新版歌祭文 野崎村の段

人形が生きた人間の本質を追求する文楽 身を引く女の悲しい決意



近松半二作、1780(安永9)年初演。通称は「野崎村」「お染久松」。油屋の一人娘お染が、嫁入りを前に、恋仲であった丁稚の久松と蔵の中で心中したという実話に基づく。先に発表されていた歌舞伎狂言や浄瑠璃作品に対して「新版」と名付けられたという。お染が詣でた野崎観音は、大坂から約10kmの近郊にありながらも風光明媚なところで、霊驗あらたかな観音様がまつられており、当時はかっこうのお出かけスポットだった。

佐藤太一(埼玉大学教育学部附属中学校)



「文楽」を音楽の授業で扱う意味は何か。私は、「義太夫節」の魅力だと思います。義太夫節の音楽の力は、人形に魂を吹き込みます。授業では「魔王」と比較、関連させて扱います。情景や登場人物の心情を表している三味線の魅力、登場人物をどのような声やリズムで語り分けるのか、「詞」「地合」「節」の特徴とそのよさなど、音楽的な特徴を感じ取り味わいながら聴く活動を通して、生徒は文楽の世界に引き込まれていきます。

魔笛 *Die Zauberflöte*

歌と芝居で魅せる！ スペクタクルな世界へようこそ



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト作曲、1791年初演。当時、オペラがイタリア語で書かれていたのに対して、この「歌sing」「芝居spiel」はドイツ語で演じられ、その派手な舞台は大衆にたいへん人気だった。「夜の女王のアリア（復讐の炎は地獄のように我が心に燃え）」は有名なアリアの一つだが、夜の女王がコロラトゥーラの超絶技巧を発揮する箇所では「ザラストロを殺さないのなら、もはやお前は私の娘ではない」と高らかに歌っている。

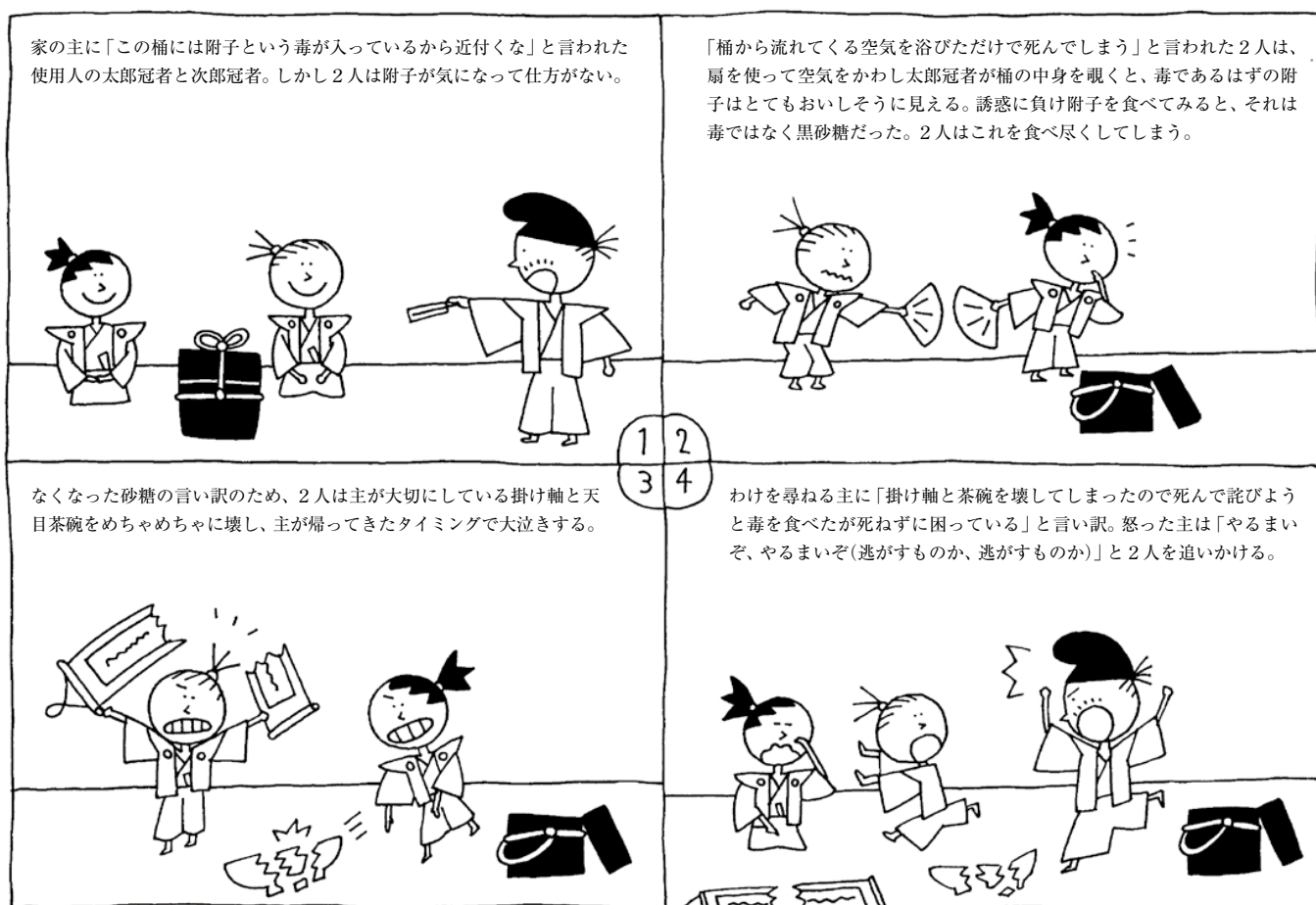
松井孝夫（聖徳大学）



『魔笛』の魅力はズバリ、「おとぎ話」のような展開で「ハッピーエンド」にたどり着き、愛にあふれているところです。大人も子どもも楽しめる「ファンタジーの王道」といえるのではないのでしょうか。さまざまな人間模様が、多彩な登場人物の歌う音楽によって絶妙に表現されています。いろいろなキャラクターが醸し出すアリアや重唱などを楽しむことができます。「おいらは鳥刺し」「パパパの二重唱」「夜の女王のアリア」などを聴いて、自分の好きな音楽を見つけてください。

附子

狂言は笑って観る！ 描かれているのは普遍的な人間の姿



附子(ぶし)とはトリカブトの根からつくる漢方薬であるが、毒矢などに使用される猛毒でもある。狂言『附子(ぶす)』は、もともと鎌倉時代の仏教説話集に原型がある作品で、ケチな和尚さんと小僧さんが登場する物語である。一休咄、つまり「一休さん」の中にも同様の説話が見られる。実際、狂言が発展しつつあった室町時代において、砂糖や掛け軸、天目茶碗は高価なものだった。(実際の狂言の舞台では、掛け軸や茶碗は使用しません。)

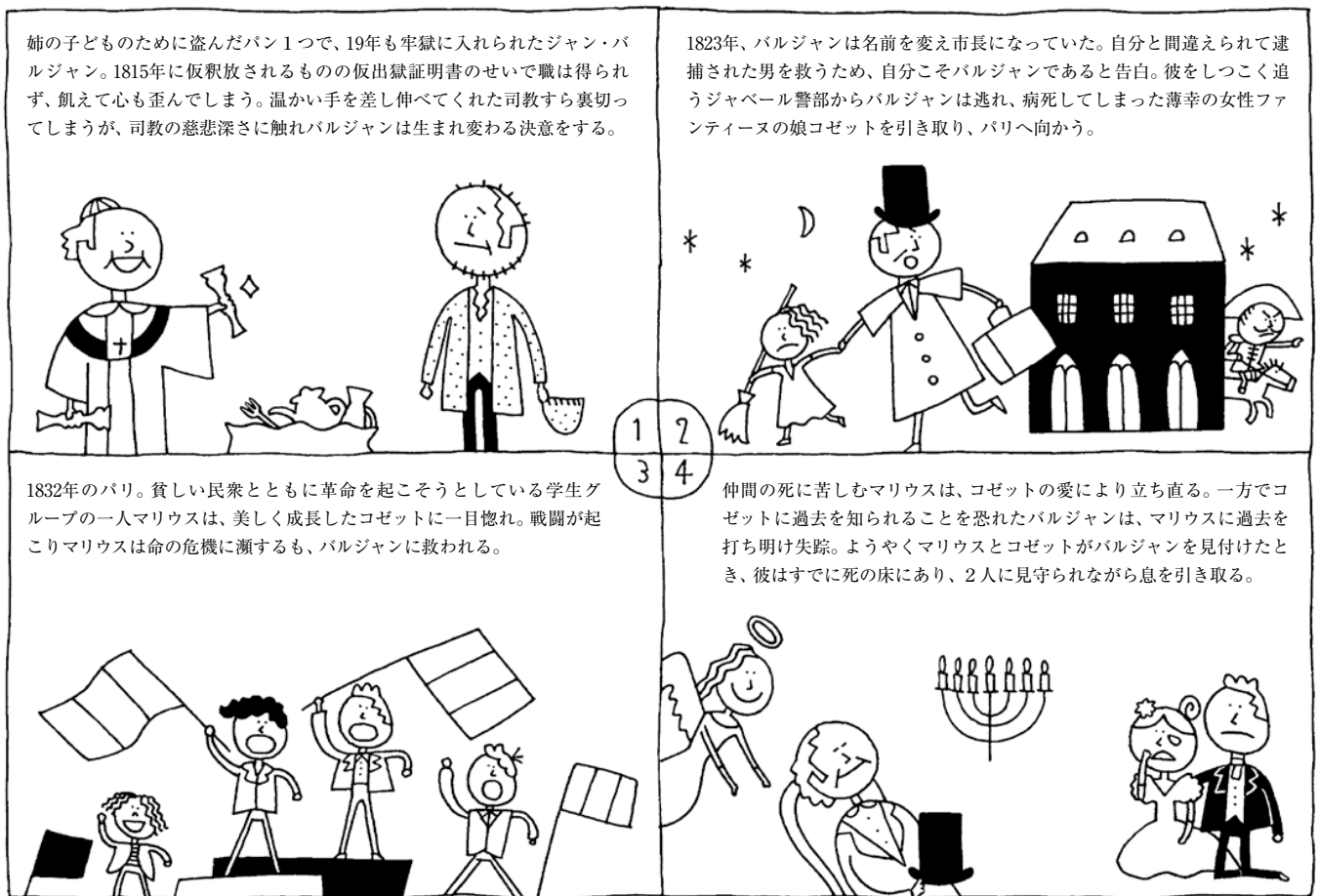
江田 司 (名古屋学院大学)



何と言っても太郎冠者と次郎冠者の掛け合い「扇(あお)げ、扇げ!」「扇ぐぞ、扇ぐぞ!」が見処聴き処!!
「そりゃ」「見たぞ」を挟み、一つの流れに乗って繰り返される。テンポも上がる。これぞ“序破急”(野村萬斎談)。

レ・ミゼラブル *Les Misérables*

ミュージカル巨編！ ある男の一生



原作は1862年にヴィクトル・ユゴーが執筆した長編小説『Les Misérables ああ無情』。ミュージカルのオリジナル脚本はアラン・ブーブリルと、クロード＝ミシェル・シェーンベルク（作曲も）による。1980年にコンセプトアルバム『Les Misérables』が発表された後、パリで『レ・ミゼラブル』の前身となる作品が上演された。現在の作品はこの改訂版で、1985年にロンドンで初演された。このコンビによる他の作品には『ミス・サイゴン』がある。



河合紳和（静岡県立清流館高等学校）

『レ・ミゼラブル』の音楽の魅力は、メロディーが美しく親しみやすいこと。同じメロディーが物語のさまざまな場面に配置されていて、それぞれの雰囲気の違いを聴き比べるのも、この作品の楽しみ方の一つです。ミュージカルでは、音楽に込められた感情やメッセージをより鮮明に表現するために、歌手たちが独特の発声をしたり、メロディーやリズムを変えて歌い回しを工夫したりすることもあるので、こうしたミュージカル特有の歌唱表現にも注目して授業を展開します。

学校音楽とアウトリーチ

第6回 さまざまな「交流」が広がるアウトリーチ

佐野 靖（東京藝術大学教授）



① 清瀬市の古民家

この秋もさまざまなアウトリーチを通して「交流」が広がりました。写真①は、清瀬市の古民家「旧森田家」での津軽三味線コンサート（10月24日）、写真②は、学校法人町山学園まどか幼稚園でのお箏体験コーナー（12月3日）の様子、写真③は、気仙沼市立^{にいつき}新月中学校でのアウトリーチです。今回は、気仙沼市立新月中学校でのアウトリーチに焦点をあて、演奏家と中学生の交流の様子を紹介します。

プロジェクトの概要

11月14日～16日、宮城県・宮城県教育委員会等の後援のもと、登米市（おおみテラス）、気仙沼市（新月中学校）、栗原市（^{つぎだて}築館高等学校）において「藝大アウトリーチin宮城」が実施されました。本プロジェクトに参加した演奏家は、上野耕平（サクソ）、黒岩航紀（ピアノ）、長尾春花（ヴァイオリン）、山下靖喬（津軽三味線）の4名で、いずれもコンクールで日本一に輝いているヴィルトゥオーゾたちです。

「生き方について学ぼう」交流会

11月15日（日）実施の新月中学校でのアウトリーチには、上野君、黒岩君、長尾さんの3名が参加。新月中学校は振替で授業日とし、全校生徒が登校。午前中は、吹奏楽部の指導を上野君が担当、吹奏楽部以外の生徒たち約100名は音楽室と多目的室に分かれ、「生き方について学ぼう」交流会が開かれました。「志教育・総合的な学習」として位置づけられたこの時間は、生徒の進行のもと、演奏家が生徒の質問に答えていくというスタイルで行われました。午後は、3人の演奏家による地域に開かれたコンサートで、校内の椅子が足りなくなるほどの盛況でした。

実のところ、午前中の生徒との交流会には少々不安を感じていました。どんな雰囲気の中でどんな質問に演奏家はどう答えるのかと。ところが、始まっ

てみると心配など吹っ飛び、活発な意見交換が行われ、演奏家の生き様や人間性の一端が「実感の言葉」を通して明らかになりました。生徒にとっても演奏家にとっても貴重な経験になったことはまちがいありませんし、そうしたやり取りやかかわり方を見守っていた先生方や私たちにとっても、多くのことを学んだ実り多い会になりました。

生徒の心に響いた演奏家の言葉

ピアノの黒岩君には、いきなり「人生って何ですか？」の質問が飛びます。「えっ！」と驚いた黒岩君でしたが、「無



② 学校法人町山学園まどか幼稚園

限の可能性のあるもの」と返します。「一日何時間ぐらいピアノを弾いていますか？」の質問に対しては、「10時間ぐらいかなあ。多いときは13時間ぐらい」という今年度日本音楽コンクール第1位のピアニストの回答に生徒から驚きの声があがります。力をうまく抜いて弾くことができているから、つまり不要な力みが取れているから、何時間弾いても疲れないという発言は、部活でスポーツに打ち込む生徒にとっても大いに参考になったと思われます。「本番の時は何を考えながら弾いていますか？」に対する「何も考えていません。聴衆の顔を見ています」という答えには、生徒は一瞬ポカンとしてしましますが、「聴いてくれる人と一緒に音楽をつくっている感じを大事にしたい」という言葉から、音楽という営みがコミュニケーションそのものであることを少しは生徒も感じ取ることができたのではないのでしょうか。テスト前の効果的な勉強方法を聞いた生徒には、しっかり寝て日常のリズムを壊さないこと、「何か発見があると思って勉強した方がよい」ことなど伝えてくれました。

ヴァイオリンの長尾さんは、次のコメントが衝撃的でした。「これまでの人生で一番つらかったことは？」というある意味厳しい質問に対し、少し考えた彼女は「3.11の東日本大震災です」と答えたのです。決して当地だからと準備していたものでないことは続く言葉から明らかです。「震災があって音楽をやめようと思った頃があった。そんなときに演奏



③ 気仙沼市立新月中学校

をしていたら、自分自身が特別な素晴らしい感動に浸ることができた。人に楽しんでもらう前に、音楽をすることですでに自分が癒されていることに気づいた。音楽に導かれて生きている」ことなどを実感したというのです。震災後すでに何度も被災地に足を運んでいる長尾さんの秘められた心情を中学生の質問が引き出した瞬間でした。

このように音楽交流にとどまらず、人間交流にまでつながるところにアウトリーチの醍醐味があると思います。

「ほんものコンサート」

これは、11月16日(月)実施の宮城県築館高等学校でのコンサートの名称で、佐々木壽徳校長が自ら命名しました。その佐々木校長から本番直前に、「本

物」の意味を生徒に伝えてほしいという依頼がありました。日頃アウトリーチには即興的で臨機応変な対応が不可欠と言っている身として断るわけにもいかず、口について出たのが、「本物とはどのような状況でも手を抜かないということ」。若手演奏家とのアウトリーチを通して自然に浮かび上がってきた言葉です。

音楽を 「ことば」にする 吉田純子

〔第1回〕 音大を出て、新聞記者の道へ

聞き手：市川かおり（株式会社教育芸術社 代表取締役社長）

さまざまなジャンルを切り口に、音楽に迫ってきたこのコーナー。

本号から、ヴァンの使命でもある「言葉で伝えること」をテーマにお届けします。

吉田純子さんは、音楽大学出身の敏腕新聞記者。音楽関連の記事などで、そのお名前を記憶されている方も多いのではないのでしょうか。

音楽が心に響くように、言葉は音楽や人間とどう響き合うのか…。

こうした問いかけに対する吉田さんのお話を、教育との関連も含め3回にわたってお送りします。



○よしだ・じゅんこ

1971年、和歌山市生まれ。1993年、東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、1996年、同大学院音楽研究科（西洋音楽史）修了。1997年、朝日新聞社入社。仙台支局（警察、市政担当）、東京本社学芸部（家庭面）、整理部（地方版）、文化部（音楽担当）、広告局広告第4部（金融担当）を経て、編集委員（音楽担当）。

記者になって再認識 ——さまざまなことが、 結局音楽とつながっている

市川：吉田さんの書かれた記事が大好きでスクラップしています。そもそも新聞記者になられたきっかけは何だったのでしょうか？

吉田：大学で音楽の理論や学問的研究を行いながら「こんなにおもしろいことを、学者だけが独占してはもったいない！」という気持ちがどこかにありました。でも、新聞記者になったのはたまたまです。就職活動で私は3社だけ受け、NHKに落ち、朝日新聞社には受かった。そんなきっかけです。

市川：最初はどのようなお仕事をされたのですか？

吉田：まず仙台の支局に配属されました。記者のいろはを覚えるため、とにかく最初は支局に行く。そこでサツまわり（警察への取材）から始まり、地元の選挙取材、そして朝日新聞社なので高校野球。高校野球の取材では、記者はスコアブックをつけ、記事を書き、写真も望遠レンズを使っ

て自分で撮るんです。当時私は野球のルールにうとく、ファウル4回で1塁へ行けると思っていた状態。あるとき、けがをして試合に出られなかったキャッチャーの生徒を取り上げたくて、記事にして送信しました。“…来年は僕もあのマウンドでプレーしたい——”するとデスクから電話がかかってきたんです。「この子はなんだ、来年はピッチャーになるのか?」「いいえ違います」…帰ってからこっぴどく叱られました。私は「グラウンド」と「マウンド」の違いさえ知らなかったのです。

＊

市川：その人の得意な分野であったり、それまで何を学んできたかは全く関係ないんですね。

吉田：新聞記者の中には自分の専門分野がある人もいますが、それだけでは狭い範囲の読者に向けて書くことになってしまいます。私はもちろん音楽の担当を見越して採用されたと思うのですが、中には音楽の記者なんていないという人もいます。そういう人たちを納得させるために、音楽以外のこともできることを示さなければと、人の倍努力しようと思いました。広告営業で金融関係を2年担当しましたし、レイアウトや見出しを制作する整理部にも異動しました。

市川：自ら積極的に打って出たと…。

吉田：大学時代にアルバイトをたくさんした経験から「何をやっても音楽につながるんだ」という考えをもっていました。新聞社は一般的に記事をつくる編集局、広告で支える広告局、新聞を売る販売局、この3つの柱で動いていて、編集に入った人が局をまたいで異動するというのは、ほとんど転職に近いものがあります。2年間という決まった期間の異動でしたが、それでもやはり営業を経験して「音楽と結局つながっている」ことを実感しましたね。

市川：ご苦労もあったのではないのでしょうか。

吉田：広告の営業で銀行や証券会社をまわって…野球のことも分からなかった人間ですから、金融なんて分かるわけがない。そもそもお金や数字が得意じゃないから、音楽をやったようなものだし(笑)。



イラストレーション：ソリマチアキラ

でも人間って、いちばん嫌いなこと、苦手なことをするとき「自分」が見えてくるのではないのでしょうか。好きなことばかりやっているときは、入り込んでいるので自分が見えない。嫌いなもの、嫌いな人に出会ったとき、なぜ嫌いなのかしっかり向き合って考えたことがあります。そのとき、お金にかかわっている方も、若干の後ろめたさがあることに気付いたんです。そのカムフラージュに文化が使われることもある。海外ではユースオーケストラのオーナーが銀行の場合があります。このオケの団員の親たちはその銀行の顧客。サービスの一貫として銀行はオケを運営し、演奏会を開いてみんなを喜ばせる。文化というものを気持ちの潤滑油にすると、ビジネスとしての金融もうまくいきます。それが「お金をくれ、ファンドをつくれ、もっと預けろ」だけの世界だったら無味乾燥になってしまう。

市川：音楽がある種のクッションや交流の役割となるんですね。

吉田：それは政治にも言えることで、スポーツと芸術はアジアにとって重要な潤滑油です。「オーケストラ外交」という言い方がありますが、突然「領土くれませんか」と言うわけにはいかないので、晩餐会でおいしいものを食べたり、オペラやオーケストラの演奏会に行ったりして、お互いを少しずつ近づけていくわけです。音楽の外交を見ると政治やビジネスの中枢が見えてくる…そこに気付くと、広告営業もおもしろくなりました。

＊

市川：書かれた記事は、どのように世の中へ出ていくのでしょうか？

吉田：水路を流れるように出ていきます。まず記者が書いたものはデスクが見ます。書き直すこともあります。そのまま通ることもあります。それから整理部へ行ってレイアウトされ、見出しが付けられます。それが掲載前日の定時に社内に配布されて、いろいろな人の目を通り、当然編集局長室にも渡る。全員が全ての記事に目を通してはいるわけではないと思いますが、重要なものや大事なものは読まれます。その段階で「これは変だろ」という場合は修正します。

市川：没になることもあるのですか？

吉田：紙面に穴が空いてしまうので、任された場所には責任をもちます。通常の社会面などでは文字量を見てからレイアウトを決めますが、合唱コンクールのような「決め打ち」では、あらかじめ何字何行とレイアウトまで決められています。20時ぐらいには紙面ができていなければならないので、1行でも短くも長くもない行数で、この時間に間に合わせるというのが新聞社のプロの仕事です。もちろん校閲さんもいますが、記者が最後までチェックをしてなるべく完全原稿を出す、というのが原則です。

音楽と近似値の言葉を探る

市川：取材との関係で毎日のように演奏会に行かれるのですか？ご自分が行きたいものを選ばれるのですか？

吉田：毎日です。土日は2公演掛け持ちします。やはり仕事ですのでクラシックの旬のアーティストは把握しておかなければいけませんから。

市川：演奏会などの批評を書くとき、メモなどは取られるのですか？



〇いかわ・かおり



吉田：合唱コンクールのように、全校の演奏が終わった瞬間に原稿を出さなければならない場合は、プログラムの端にちょっとメモをしたり、同時並行でまとめたりということはあります。でも音楽は、時間という電車に乗ってみんなと一緒に走るようなもの。その日のお客さんと一緒に、音楽の電車に乗っているわけですね。メモを取る一瞬であっても、そこから途中下車するようなことをしたくないので、よほどのことがなければ基本的には書きません。この瞬間、この会場、このお客さん、演奏も毎回違うわけですから、その一回性がクラシックの命であり、ライブのいちばんのよさだと思っています。

*

市川：吉田さんの取材では、会話などを録音しないと伺ったのですが…。

吉田：お年を召した方で、その人の声を残しておきたいときや、事件取材などは相手の言葉を残しておかないと証拠にならないときもありますから、100%録らないわけではありません。インタビューもある意味セッションみたいなもので、空気感があります。演奏会と一緒にです。気を付けなければならないのは、相手が言ったことをそのまま書けばいい、では絶対ないということです。音楽家は基本的に音で語る人。言葉で100%その方の思いが伝わっているとは限りません。ただしその人の存在丸ごとがアーティストであり、その言葉には何らかの本質が宿っている。そこを捉えつつ、その人が出した「これだ」というワーディングを、どうすればいちばん伝わるのか考え、文章をつくっていきます。そういうときに、相手が言った一言一句に縛られてしまうと、本質から逃

げることになります。自分が感じ入ったこと、その人の肉感などを、近似値の言葉にもっていくわけです。

市川：近似値としての言葉、なのですね。

吉田：書く相手について、その方のすばらしさを書くよりは、その方が踏み込んでいるアートの世界を書くというのが私の考えなんです。そのアートの世界が分かれば、その方がどんな大きさなのかは自然に分かってきます。その方のすばらしさは分かって話していますしね。

市川：その人の描写に終わってはいけない、ということですね。

吉田：表層的に「この人がこんなことを言っていた」ではおもしろくないと思うんです。これはどのジャンルでも同じだと思います。例えば政治家を書くときに、その政治家が腹黒いかどうかではなくて、その人の腹黒さの向こうにどういう政治の本質があるのかが見えていないと、その腹黒さは何の意味もない。その人のキャラクターがなぜ存在しているのか、その背景にどんな世界が広がっているのかが分からないと、たぶん普通の「この人がこう言いました」で終わってしまいます。

市川：本質を見抜く。そこに新聞記者の目があるんですね。

吉田：合唱コンクールにしても、戦後70年や3.11に結び付けて「戦後の響きが」とか「3.11の悲しみを超え」とか書くと、嫌な感じじゃないですか。だけどその時代のこの瞬間に我々が一緒にいるのは事実であり、それが音楽に何も反映されなければ、それも真実ではないかもしれない。しかもこういう記事で難しいのは、3.11と演奏が結び付き過ぎると失礼なんですよ。だってこれは音楽なんだから。でも無関係でもない…その距離感は、新聞記事を書くときにいつも心を砕きます。無関係に書いたら音楽と社会は関係ないものになってしまうので。

*

市川：読者からの感想もくるのでしょうか？

吉田：ポジティブなものもそうでないものもきます。間違いの指摘なら謝罪するしかないのです



が、捉え方の違いの場合はつらいですね。そういう捉え方もあるのだと含んだうえで、次の記事に生かしていくしかない。100%人を納得させる記事は、それはそれでつまらないです。新聞記事も表現だと思っていますから。

市川：吉田さんの記事を拝見していると、言葉の中に音楽を聴いているときのような流れを感じます。いつも終結部がものすごく印象的で、余韻があります。

吉田：吉田秀和さんが晩年、「文章に音楽が入ってきたね」という言い方をしてくださいました。音楽のことを書いているのだから、ここに音楽が残っていなければだめなんだ、ということなのだと思います。言葉にできないものが音楽になっているのに、それを評論家や我々はもう一度言葉に戻すという、とても矛盾したことをしている。言葉にできないものが本質なのに…。結局、音楽からこぼれ落ちてくるものをもう一回言葉にする、永遠に一致しない近似値を探すようなものですが、その精神の試みは無駄ではなく、言葉を探していく作業の中で見えてくる世界はたぶん尊いと思う。音楽をもう一度言葉に近付けていくという、永遠の矛盾の繰り返しを、吉田秀和さんはものすごく楽しんだ方でした。もちろん大変なことですが、あそこまで文章そのものが音楽に近い人はいませんし、音楽を書くという一つの道を究めた方だと思います。吉田秀和さんの文章は翻訳不可能だと私は感じています。畑中良輔さんも同じように言葉への思いが強かった人です。彼は歌う際に、歌詞の朗読をととても大切にしていってました。最期まで「まず歌詞をきちんと読んでから歌いなさい」とおっしゃっていましたね。

（平成27年10月27日 朝日新聞本社にて）

Information

2016年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

10月 October

●27日(木)・28日(金)

鹿児島県 鹿児島市

第57回 九州音楽教育研究大会 鹿児島大会
第54回 鹿児島県音楽教育研究大会

大会主題 見つめよう かかわろう そして創ろう

問い合わせ先 大会事務局

鹿児島県立武岡台高等学校 盛山春樹

〒890-0022 鹿児島県鹿児島市小野町3175番地

TEL 099-281-5233 / FAX 099-281-5244

●28日(金)

岩手県 盛岡市

第64回 東北音楽教育研究大会 岩手大会
第57回 岩手県音楽教育研究大会 盛岡・岩手・紫波大会

大会主題 心に音楽のよろこびを
～感性を高め、思考・判断し、
表現する「確かな学び」のある授業の創造～

問い合わせ先 大会事務局

滝沢市立鶴飼小学校 副校長 舞田一穂

〒020-0652 岩手県滝沢市鶴飼洞畑87-1

TEL 019-687-2004 / FAX 019-687-5096

11月 November

●1日(火)・2日(水)

北海道 函館市

平成28年度 全日本音楽教育研究会全国大会 函館・道南大会
第58回 北海道音楽教育研究大会 函館・道南大会
第44回 道南音楽教育研究大会 函館大会

大会主題 ひびきあい つながり・ひろがる
音楽のメッセージ

問い合わせ先 函館・道南大会事務局

函館市立潮見中学校内 笠島美教

〒040-0044 北海道函館市青柳町10番7号

TEL 0138-23-4295 / FAX 0138-23-4296

E-mail kasajima-y@hakodate-hkd.ed.jp

●11日(金)

埼玉県 所沢市

第58回 関東音楽教育研究会 埼玉大会

大会主題 『伝わる音楽』
～音楽を共有し、
感性を豊かにする学びを通して

問い合わせ先 埼玉県音楽教育連盟 事務局

埼玉大学教育学部附属小学校 橋本慎也

TEL・FAX 048-833-6956

●11日(金)

滋賀県 栗東市・大津市・草津市・守山市(全体会は栗東市)

第58回 近畿音楽教育研究大会 滋賀大会
第29回 滋賀県音楽教育研究大会

大会主題 学びのある音楽学習の追求

問い合わせ先 滋賀県音楽教育研究会連絡協議会 事務局

東近江市立箕作小学校 教頭 八木佐登留

〒527-0091 滋賀県東近江市小脇町377番地

TEL 0748-20-3100 / FAX 0748-20-3102

●11日(金)

鳥取県 倉吉市

第47回 中国・四国音楽教育研究大会 鳥取大会
第32回 鳥取県小学校音楽教育研究大会
第43回 鳥取県中学校音楽研究部会

大会主題 音楽っていいな！
～つながろう 思いをこめて～

問い合わせ先 事務局
琴浦町立聖郷小学校 校長 森田澄恵
〒689-2355 鳥取県東伯郡琴浦町鋤529番地
TEL 0858-52-3016 / FAX 0858-49-5020
E-mail seigo-e@mailk.torikyo.ed.jp



— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2016

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2016」を開催いたします。

同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。

セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日 時：2016年3月28日(月)

12:45～17:10

会 場：横浜みなとみらいホール 小ホール

参加費：4,000円(高校生以下2,000円)

テキスト代含む

● 司 会：藤原規生

出演者：アベタカヒロ、横山潤子、飯沼信義、
三宅悠太、加藤昌則、森田花央里

合唱団：八千代少年少女合唱団(指揮：長岡利香子)

女声合唱団 青い鳥(指揮：栗山文昭)

harmonia ensemble(指揮：福永一博)

● Nコン課題曲ワンポイントレクチャー講師：

(小)大田桜子

(中)藤原規生

(高)三宅悠太

● お問い合わせ：

教育芸術社 スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168 / FAX 03-3957-1740

<http://www.kyogei.co.jp/>